芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.54　57・3

発行人・挾間正年　　編集人・原尻　実

もくじ

芸館運営に思う―立木　勝……1
特集―美しい大分―小説・詩……2
特集―美しい大分―短歌・俳句……3
特集―美しい大分―川柳・里謡……4
提言、詩心と芸術志向・会員のこえ、すこし共催行事の見直しを……5
県内の文化施設大分文化会館・芸術祭賞贈呈式……6
市町村文化活動の現況、国東町文化協会・豆知識 7
大分県演劇のあゆみ(3)・文化ニュース……8

芸館運営に思う

立　木　　勝

県立芸術会館の館長をお引き受けしてもう二年、早いものだと思う。

「音楽会、美術展覧会、演劇、能、歌舞伎等々文化の香りにひたり結構ですね」と言われる。しかし、やってみると仕事とはいえ、これが大変。例えば音楽会…。スタッフで検討が始まるのが大体一年半前、公演内容が決まると関係プロモーターとの交渉・日程・ギャラ…財政当局との予算の折衝、そして上演が決定すると宣伝に専心するが、芸術的価値の高いものが必ずしも入りが良いとは限らない。

従って勧誘にこれ努める。印ち、前売券を売って廻ることになる。そして、公演の当日の出来映えもさることながら、入場者数が気になる。ほぼ満席になれば館員一同ホッと胸を撫でおろす。入場者が少なければせめて質は良かったと自分を慰める。

考えてみると因果な仕事ともいえる。そこで文化とはと考えることになる。この芸術会館は県民の熱望により建設された筈ではなかったかと……。しかし、現実は実に厳しい。あらゆる手段を使って広報宣伝につとめても見てくれない。聞きに来てくれない。ポスターなども見る意志がなければ見えないもののようである。展覧会は未だよい。期間が長いので口コミで十分通じる。段々入場者が増える場合もある。しかし、文化ホールの方は一発勝負である。良かったと聞いた時はもう遅い。「しまった。見落した。」とよくいう。しかし、そうだろうか。見たいという意欲があれば探してでもと思うが……本当に見たい、聞きたいものを我々がやってないのだろうか？

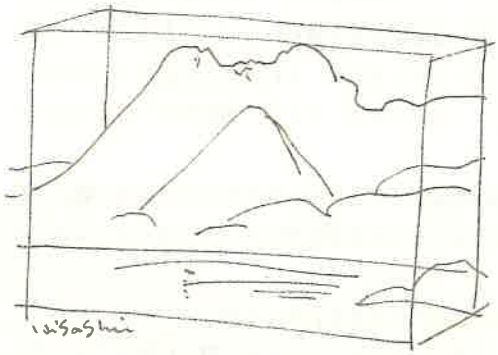
文化とはひとりでに培われてゆくものと、或る程度強引に引っ張って形づくってゆくものとがあるのではないだろうか。

いずれにしても長い歴史の中で根付いたもののみが文化として息吹いてゆくのだと思う。それが何なのか我々が将来を見通せるだろうか？

お茶を習っている娘さんが、帰りに竹の子スタイルでロックを踊る。この良し悪しは別として現実の姿である。この現実の中でこれを無視して「文化とは……。」といえるのだろうか。ひょっとして、先輩として真の文化とはこうだと、首ねっこを掴まえてでもこれを見よ、聞けとやることもあってよいのではないか。案外現代っ子の敏感なセンスに感じさせる効果があるのではないかとも思う。

県立の芸術会館が県民に対して、「芸術文化の要求にこたえる」ための具体策となると多様化した要求のどこに的を絞ればよいのか皆様の叡智をお借りしたい。エコノミックアニエルといわれながらも、実力で工業関係で世界を席捲しつつある日本が、真に信頼の上に立って世界に愛されるのは、日本人が豊かな文化人として認められた時であろう。その時こそ文化国家としての日本が成人した時代といえる。そのために我々は一歩一歩確かな歩みを進めて行きたい。

（芸術会館館長）



菅　　久　（二紀会）

特集 ―美しい大分― 文芸をとおして……

大分の風土を書き綴って三年目・いま

<小説> 志 村 泰 治

過日カーラジオでＯＢＳ大分放送の私の作文「お母さんのこたつぶとん」を聴いた。作者はあとでわかったのだが荏隈小学校一年衛藤暢一（まさかず）君であった。

冬がせまり一家はこたつぶとんが欲しい。こだわらない父親は金を出して買えばと言う。

それでもライオンのような目を見張った若い母親は、なれない手つきで何日も苦心さんたん、自力で縫いあげる。完成品の上での一家の食事。お母さんのこたつぶとんで食べるおにぎりはおいしいと作者は結んでいる。

途中から路傍に停めて聴いた私はうなってしまった。平均的小市民の生活、両親の性格、表情までが短い作品の中にあますところなく活写されているではないか。地名こそ出してはないが明らかに大分近郊の団地の小家族集団であるイメージが湧いて来るのだ。ああ、これが大分の文学だ、と思った。

美しい大分……大分の文学と言っても、高崎山のサルが出て来たり、臼杵の石仏が無理に出て来なくとも勿論よいわけだ。県民性、土着性、いわゆる善いヤツ悪いヤツもいるだろう。それらをひっくるめた人々の生きざまが大分の風土の中に躍動している、そんな小説を書きたい。

また、特定のことあるごとにかつぎ出される「作家」ではなく、書きたいと思っている県民みんなが自由に小説を学び論じる場をと思い、別府文学学校を興し三年目を迎えた。46名の参集者は14名に減ったがまだ懲（こ）りず続いている。犬も猫も書いた。星も風景も、父も母も、みんなスケッチとして文章で描き続けて来た。本年は大分県民でなければ書けない生活の中から生まれた文集を、出来れば同人誌という形で出版するつもりでいる。美しい本当の大分を、どのていどあの小学生のように描けるか。とにかく前進する。

毎月第三日曜午後１時から別府市営不老泉二階で勉強会を開いている。どなたも参加自由。

（別府文学学校主宰）

冬の夜明けに思うこと

<詩> 首藤三郎

〝美しい大分〟など、もう長いこと考えたこともない。人の心も自然も、美しさを失ってゆく、そのまっただ中に組み込まれていると思うことの方が多い。

昭和15年前後、詩を書き始めたころは、訪ねてきた友人と、ルネッサンスやランボオのことなど夢中で語りながら、気がつくと、毘沙門川のあたりの、肩まで伸びている葦の間を歩いていたり、まだきれいな海が見通せた中島のあたりを歩いていることもあった。勿論、夢中で道路を話しながら歩いていても、車を心配して振り返ることもなかった。

私の家の庭には、大分市の中心部に近くありながら、６、７年前までは、伸び放題の雑草の中を、イタチが尻尾を立てて走ったりした。腹に世界地図のような模様のある蛙もいたが、いまはそのイタチも蛙も姿を消した。昨夏、丹念に調べてみると、アメ色の小さなカニが、それでも七匹棲みついていた。

冬の朝目ざめると、まだ光りの気配もないうちに、スズメが鳴く。すると、10秒もたつかたたないうちに、ぼんやりと明るんでくる。

椋鳥の鳴き声も、その朝の寒気によって違う。比較的温かい日は、その声もやさしい。寒い朝は、刺すように鋭く鳴きあげる。自然に対する反応を、生きものとして忠実に持っているのは、すでに人ではないのだろうか。

それでも、そういうものとのかかわり合いに、ふと心があたたまる。そして美しいと思う。〝美しい大分〟というのではなく、生きているそのことを、〝美しい〟と思ったりする。貧しい私の中の〝美しい大分〟ということだろうか。

（九州文学同人、大分県詩人協会事務局長）

特集 ―美しい大分― 文芸をとおして……

美しい大分の山を詠う

<短歌> 山住久

飯田高原に生まれた私は、幼ない時から久住山をはじめ九重連山を見ながら育った。小学校に通う頃には、久住山や大船山には遠足で何回も登った。三俣山、星生山、泉水山、涌蓋山、崩平山などにも一度は登った。九重連山はアルプスのような切りたった山ではなく、なだらかな稜線を描いており、私の心には母なる山というイメージを抱いている。「古里の山に向いて言うことなし古里の山はなつかしきかな」と誰れかがこんな歌を作っているが、故郷を出た後も山を愛する心は強かった。勤めのため中国にも行ったが、大分市に居を移して30年、ここが第二の故郷となった。由布、鶴見、高崎山などが古里の山になった。

萬葉時代から大分の山を詠った短歌は多い。自然が破壊されたと言っても山は変わっていないし、今後も変わらないだろう。そして私達も、私達の後をつぐ歌人たちも古里の山を愛し、山を詠ってくるだろう。山の歌、いつくかを掲げて山を偲ぶよすがとしたい。

『おとめらが放髪を木綿の山雲なたなびき家の辺見む』万葉集巻七　『朽網山夕居る雲の薄れ行かばわれは恋ひむる公が目を欲り』万葉集巻十一　『かげらふの燃ゆる春日に豊国の鶴見の丘に雪降りにけり』物集高世　『草深野ここに仰げば国の秀や久住はたかし雲をうみつつ』北原白秋　『嬉しきとき悲しきときにわが対ふ両子嶺ばかり親しきはなし』財前注花　『秋晴れの夕べとなれば四極山頂松のよく見ゆるなり』佐藤格　『み社を箭山をうつすこの池にめばえたるわが歌心とも』大悟法利雄　『大いなる命にすがりゐるごときこころ足らたに対ふ箭山峯』原常雄　『十日月光そひながら蒼々と祖母の山嶺星いまだ暮れずも』浅利良道　『取よろう四方の山々秋ふけて寂しき色となりにけるかも』藤野武郎

（九州大衆文学会長・大分県歌人クラブ事務局長）

豊富な季題（季語）を生かせ

<俳句> 久保青山

大分県は、県北から県南まで、また豊肥・久大沿線へと山あり、海あり、温泉あり、湖があり、神社あり、仏閣ありで、きわめて変化に富む「豊の国」であります。したがって、24節気を基盤とした俳句歳時記の季題に富むものであります。昨年第１回全国豊魚祭の折、二豊の海は、魚族の宝庫でもあるということを聞きましたが、俳句においても、季題の豊富なことは、また見逃せないものと思います。この自然に恵まれた観光地というより句作に適した場所は、県内全市町村にわたり、数限りなく多いのであります。これらの地の景色を俳句とするだけでなく、生物・風俗・習慣等も一歩輪をひろげて、写生するのもよかろうと思います。

つぎに、よい季題が沢山ある「大分県」だから、いま老令化しつつある、句作年令者の若返り対策を講じなければならないでしょう。学生・青年層の指導を、濃厚にし、婦人層にも着目する必要があろう。毎日俳句はつくらないが、読んでいる。俳句の意味も、なんとなくわかりますという階層の人々が、大変多いのである。

これらの人には、ちょっと句作をすすめてゆけば、句作を、つづけることができると思います。

もって、俳句人口の増加を、はからなければならない。

本県の場合、指導者の問題であるが、よき指導者も居られることだし、豊富な季題を生かして、よい句をつくるようにすることが急務のようだ。

（大分合同新聞読者文芸年間賞受賞者の会代表
大分県俳句連盟理事）

特集 ―美しい大分― 文芸をとおして……

一層の飛躍を……

<川柳> 疋田青峰

県内に川柳が芽生えたのは、大正の中期である。時流に乗って昭和初期には見事に開花した。即ち別府・大分に番傘川柳会が結成され、大阪の番傘川柳本社に所属した。昭和10年代には、その傘下でも屈指の有力川柳会に発展した。別府では川柳文化、大分では窓・大分番傘などの機関紙が発行されたが、その盛況がうかがえる。

こうした土壌の中で、戦後の大分県川柳の復活は早く経済復興に歩調を合わせる如く各地に川柳会の誕生を見たのである。終戦直後臼杵に花火吟社が、続いて鶴崎・安心院・別府各地・竹田などに会が結成され、これらが相集まって、43年1月、大分県番傘川柳連合会が組織された。

これを契機に川柳会結成の機運が盛り上がり、豊後高田・佐賀関・宇佐・坂の市・佐伯・国東等の会が生まれた。連合会は傘下に18川柳会を擁する大世帯となった。月刊で機関紙「高崎山」を発行、既に210号に及んでいる。この購読者は400名を突破し、逐年増加の傾向である。

県単位の川柳行事は、夏の短文学大会、秋の芸術祭共催県川柳大会、加えて新春のつどい・凡柳句碑祭などがある。参会者は常に100名を越している。傘下各川柳会も創立記念大会・吟行・月例句会等を企画し、独自の活動もつづけている。

全九州番傘川柳大会は、例年各県を廻って実施されているが、今年は第18回長崎大会が恒例の9月開催される予定である。本県は第1回を始め既に4回会場地として活躍した。近年は参加400名を越す盛況である。

本県の川柳人口は九州各県では、多い方で大会参加者は、その10%を越す現状である。また日本川柳協会という全国組織にも加盟し、例年行なわれる全国大会へも参加者・投句者が次第に増加の傾向である。その外全国各地で持たれる番傘川柳大会へ出席者も多い。川柳の発展のために有能な若い人達の参加を念願するものである。

（大分県番傘川柳連合会副会長・
大分番傘川柳会会長）

咲き誇るつつじ 郷土大分への讃歌

<里謡> 土屋北彦

古くは豊の国といわれていたこの大分の地は、大自然・人情ともに文字どおり美しい土地柄である。文芸の世界では、昔からさまざまにこの風土を讃えてきているが、私たちの関わっている「里謡」という短詩型文学のジャンルでも例外ではない。

里謡集の古典とされる明和9年刊行の「山家鳥虫歌（諸国盆踊唱歌）」に

『さても見事なみたらいつつじばんにつぼみて
よなかにひらくよあけがたにはちりちりと』

という里謡が豊前の部に見える。県内のつつじは20種ほどあるそうで、市町村の花木として珍重されているように、県民に馴染みが深い。神社の御手洗のそばに咲き誇る美しいつつじの千変万化の姿を的確にしかもリズミカルに唱いあげている。

これと同種の里謡が直入郡朽網郷の「よいやな節」に見られる。

『さてもみごとなまえだけつつじ枝はゆかわじ
葉は市村に花は竹田のぬめりせに
さても見事な祖母山つつじ花は南郷に葉は熊
本に枝は野じりの川上に』

山家鳥虫歌で、御手洗のそばに咲くつつじの花は、ここでは「前嶽のつつじ」「祖母山のつつじ」というように郷土の特定の場所に咲く花と発展し、美しい郷土大分への讃歌として愛唱されるようになる。もともと里謡は作者をもたない集団創造の産物である。

労働の間に、収穫の喜びに、盆踊りの夜に、人々の口から口へ伝えられ広められていった一つの里謡の変遷がここに見られる。

里謡は発生当時から話しことばで唱われ、労働の謡として作られて来た。それは庶民日常の詩の源泉であり、美しい風土の産物でもあった。私たち里謡作家はこの伝統を今日に伝えたいと微力をつくしている。

（大分県里謡作家連盟代表）

提言

詩心と芸術志向

芸振理事
深田光霊

この頃の吟詠は、高い次元の芸術志向から、諸条件に制約され、むずかしくなったと言うが、決してそうではない。まず原点にかえって考えてみるがよい。

吟詠の素材の多くが中国であったことから、漢詩を抜きにしての吟詠は成りたたない。詩は散文に先立って文学上に姿をあらわし、その先進的地位をいつまでも失わない。漢詩も伝統の古さを守りながらも、新しい感覚を盛り、俗語さえ気易く受けいれて品格をなくすることもなかった。幾多の歴史的変遷と洗練を経て成立した定型は、千篇一律のように見えても、感情の律動は、千変万化の妙をきわめているのである。ここで忘れてならないことは、文学としての詩に感激し、魂の躍動を覚える吟詠が、はからずも宗教的基盤から発生した文芸であるという認識である。日本の古典に出てくる歌を、神詠と表現するのも同じ理由からで、神に対する、もしくは神に関する言葉として敬虔な誠がこもっていなければならない。用語措辞も過誤のないように注意しなければならないという考証から、吟詠を通して、神意を正しく人に伝え、誠意のこもった人のことばを誤りなく神に達する芸術的詩心表現の原点である。

この頃流行の音程、アクセント、発声、詩心といった芸術的表現のための条件も、訓読という方法によって、日本文学の領域に加え、しかもその形式や精神をも模倣し、摂取して、いわゆる日本漢詩を創造した知恵のあらわれである。もちろんそのために精神生活を複雑多岐にし、また豊富にもした。今や国を挙げて、心の問題の問われている時、吟詠人口、381万人という数多くの人たちが、心身の栄養と活力を求めて、日夜この道に精進している姿は、何ともたのもしい限りではある。

申すまでもなく、芸術は創造であり省略であり、一刻の停滞を許さない。高い次元の伝統芸術の高揚を志向する限り、更に多くの条件整備を余儀なくされるであろう。

されば、その煩雑な形式上の諸制約・諸条件を、みごとに克服して吟詠をわが物とし、後の世へのこよない贈り物としたいと思う。

会員のこえ

すこし共催行事の見直しを

元芸振事務局
太田悠一

県民あげての参加を念願とする県芸術祭でいつも問題となるのは全行事の半数が大分市内での開催におわるという結果である。同市の文化団体が他市町村と比べて多いせいもあるが、県芸術祭の趣旨が県内全域に具体的に波及し得ないでいるのも一因であろう。

ご承知のように県芸術祭行事には県（および関係機関・団体）と当事者団体との共催行事（これには県は僅かながら出費）と、団体が主催し県は後援をする参加行事がある。

この共催行事の〃株〃を市町村の行なう総合文化行事にも〃根分け〃するテはないものか（この行事はこれまでずっと参加行事）。

総合文化行事の内容は、絵画・書道・写真・生花展、謡曲・日舞・バレエ・箏曲・民俗芸能・詩吟・民謡と盛沢山で子供にいたるまで多数参加観覧し、とても賑やかである。中には淋しい会場のところもあるが。

この種行事には芸術性という点からはほど遠いものが多いという意見もある。

だが、参加者は張り切っている。出来不出来は別、月日をかけた苦心の作品を見に行ってほしいと知人に宣伝する人。舞台では、ウマくできた人・トチった人・幕引にいたるまで久々の文化的体験に興奮している。人間味溢れ地域性豊かな、そして楽しい行事である。

県民あげての芸術祭参加を目標とするならば、市町村からの書類提出による参加を待つよりも、共催行事として計画的に参加を促してはどうであろう県芸振会議・県芸術祭運営協議会などでお考え下されば思う。

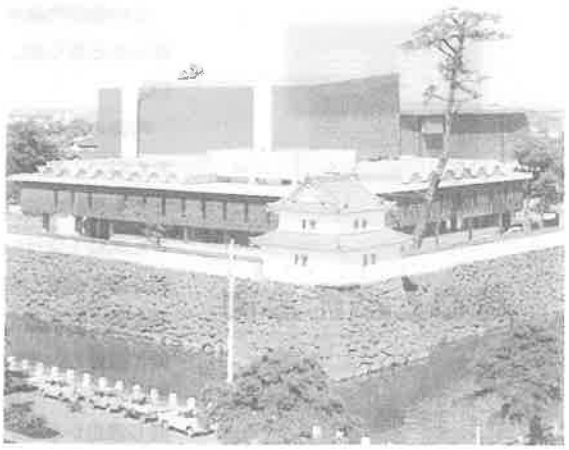
蛇足ながら、共催市町村へは県内の優れた演劇・舞踊・音楽・美術・文芸・児童文化団体に県が要請し、現地での上演や講座を開いて頂いたり、会場の近くでは移動図書館車が一日図書館を開くなど……。

どうも私の発想は、昔ながらの移動公民館的で恐縮である。

（長唄師範
（社団法人長唄協会九州支部代議員）
松永忠四郎
（太田悠一）

県内の文化施設（3）大分文化会館

大分文化会館は市民の集会、文化教養の向上等住民の福祉を増進するため、大分市が約４億７千万円の経費を投じて建設し、昭和41年９月完成、同年10月12日開館しました。会館の敷地面積は5,362.2㎡、建物は延面積7,090.53㎡、地下１階、地上３階の鉄筋コンクリート造り（一部鉄骨造り）で、各会場の概要は次のとおりです。



大ホール

収用人員　2,060席、車イス用席５台収用
舞　　台　間口21m、奥行13m　高さ８m
迫り上げ　1.8m×17m　1.2m×17m
オーケストラピット　16m×3.5m
楽　　屋　洋室２室、和室１室　楽屋事務室１室
浴　　室　２室
用　　途　音楽会、講演会、演劇、能舞踊その他各種集会に最適です。

小ホール

第１小ホール（会議場兼結婚式披露宴会場）
面　　積　312.32㎡
収用人員　150人（イスのみ200人）
第２小ホール（展示場）
面　　積　431.72㎡
パネル設備もあり、各種展示会用としたもので、会議等にも使用できます。

会議室

第１会議室　面積66.5㎡　収用人員　30名
第２会議室　面積84.2㎡　収用人員　36名
第３第４会議室　面積　26.8㎡　収用人員　14名

結婚式場

挙式場　66.5㎡
附属室　化粧室・配膳室

茶　室

１階　茶広間（16畳）待合室（３畳）　水屋
２階　茶室（4.5畳）　茶庭　3.31㎡　待合室（３畳）　水屋

食堂・売店

食堂総面積　236㎡
館内売店（大ホール内）18.8㎡
会館利用者はもちろん、どなたでも自由に利用できます。

第17回 芸術祭賞贈呈式

五六年度の芸術祭（第一七回県芸術祭―県・県教委・芸振・合同新聞社・四者共催）による賞等の贈呈式が、一二月二五日に行なわれ、芸術祭賞の「萬謡会」及び「県日舞連盟」はじめ、五団体、三個人に賞状、入賞トロフィー、三個人に特別感謝状。全参加行事に感謝状等が贈られた。

今回は一〇九の参加行事（昨年は九七）を得、県芸術祭が年々定着していることを示している。新人賞に、彫刻や三味線といった地味な分野からの授賞がきまったことも、特筆すべきことであった。

（新人賞を受ける三味線の池田萬穂さん）

国東町文化協会は、昭和45年12月13日に、謡曲、詩吟、尺八、民踊、箏曲、音楽、など14部門の加盟によって、設立記念、第１回芸能文化祭を開催し、以来毎年11月３日の文化の日を中心に、国東町中央公民館に於いて、国東町、国東町文化協会、国東町教育委員会、国東町中央公民館が主催で、大分県、大分県教育委員会、大分県芸術文化振興会議、大分合同新聞社後援によって開催を続けて、既に12回に及び、加盟団体も、逐次増加して、現在23団体に達して、年を重ねる毎に、その技芸の向上は、目を見張るものがあります。

国東地方の、伝統芸能として、古くから空也念仏踊

回を重ねる毎に向上のみられる芸能文化祭

市町村文化活動の現状　国東町文化協会

連帯感を高め伝統の町作りに活動……

国東町文化協会長　柴　田　文　利

左エ門、六調子などの盆踊りが盛んで、盆時分は勿論、毎年の町体育祭などの時でも、アトラクションに民踊部門が先導して、参加者全員で踊ることが通例で、又昭和30年10月、県民謡大会で、国東町北江地区に昔から伝わっている民謡のまてつき唄が一位になってから、忽ち有名になって北江地区民による、正調まてつき唄保存会が生まれ、文化協会に名を連らねるに至り、振り付けもなされ宴会などにつきものとなりました。昭和54年11月３日、国東文化協会設立10周年記念大会開催その翌日、第４回県民の日ふるさと祭りが、中央公民館で、平松県知事、立川清澄氏、佐良直美歌手を迎えて、４日・５日と町はふるさと祭一色に覆われた感でした。各部門では趣味を通じ、町民同志の対話交流を計り、連帯意識を昂め、伝統を守り明るく豊かな文化の町づくりを目標に会員の増加に努めて、民踊部では国東町郷社桜八幡の夏の大祭毎に社殿に於いて民踊を披露して参拝者を慰め賑わせたり、地域の産業文化祭に詩吟、民謡部門と共に芸能大会を催して、観衆を湧かせている現状であります。又、夫々部門毎に年１回以上の発表大会を開催して、技能の向上と町民への慰安を兼ねて宣伝と普及に努めており、吟詠部門に於いては、地味な文化活動ではあるが、詩道を通じて青少年の健全育成と、町民の日常生活の糧として地域23カ所に分会を設け、毎週１回の吟詠練習会を開いて情操を培い、健全思想の育成に励んでいる現状で、又青年団、婦人会に於いても、岩戸神楽の継承保存、風刺劇の演出や管絃楽団組織が成されるなど、国東町の芸能人口の増加に従って、明るく、豊かで、住みよい、仏の里、文化の町国東の発展を期待するものであります。

豆知識

アイロニー（皮肉、反語、あてこすり）
真意と反対の言いまわしを用いて相手を非難・否定する表現法。

アナクロニズム（時代錯誤）
一般的には前時代的思想や、言動を冷笑的にさしていう。

ウィット（機知、頓知、才知）
ときには「ユーモア」や「しゃれ」などと混同して使われる。平凡でなく、新奇な、人の思いつかない発想や言葉をいう。

オプチミズム（楽天観・楽天主義）
世界や人生の意義や価値などを究極的には善であるとする見方
ペシミズム（厭世観）の対語。

エスプリ（精神）
「肉体」に対する「精神」を意味する。才気・機知をも表わす言葉で新しい近代的な精神活動をさす。

ショートショート
小説の一形式。短編小説よりさらに、短い作品をいう。

ペーソス（ギリシャ語のパトス情念衝動の意）言語、文章、人生体験などの哀れさをさそう調子「悲哀・哀感」

れんさい

大分県民演劇のあゆみ（その3）

中沢　とおる

敗戦は、日本の国に始めて自由をもたらした。精神の糧に飢えていた日本の民衆は、農村の町や村で、焼土になった街の片隅で、歌い踊り、小屋掛芝居をした。県下でも、すべての町や村でこの現象がおきた。〃赤いりんご〃や〃伊那の勘太郎〃や〃やくざ芝居〃が多かったが、それは、始めて自由の空気を吸った民衆が、明日に向かって生きる道を模索した姿であったとみてよい。焼野ケ原の大分の街に、前進座がシェイクスピア劇をもって訪れたのはそういう状況下であった。ぽつんと焼け残った金池小学校の講堂で上演された「ヴェニスの商人」は、オアシスの水のごとく、大分の人々の心をうるおした。食物も衣類もないどん底の生活に喘いだ世相の中で、人々は開演時間をまち切れず、長蛇の列をつくった。前進座はそれから毎年大分を訪れることになる。若草映劇（現在のニチイの場所）で上演した「真夏の夜の夢」は、観客の大勢が場外に溢れ、舞台の声をスピーカーで外に流した。河原崎長十郎が発熱し、眼科の大坪建三先生の手当てで舞台をつとめた。演ずる方も観る方も、精一杯に、戦後民主主義の礎を固めるため、文化芸術の活動に没入した日々であった。

そのうねりは、アマチュア演劇の中に、職場演劇・青年演劇・学校演劇という注目すべき活動をうみだす。とくに職場演劇・青年演劇は、働く者たちの政治的自覚と芸術的要求のなかで発展し、戦後の新劇界に一定の影響を与えた。

二二年に、大分でも労働組合文化部の中に演劇部が設置され、その活動が急速に充実していった。山本宗生が病のため新協劇団を辞し、大分へ帰り、県社会教育課に務め、青年演劇を指導したことと自らがリーダーとなって県庁内に〃ざぼんグループ〃という演劇集団をつくったことが、大分の戦後演劇活動の核になったと考えていい。電産・国鉄・日鉱佐賀関、すこし遅れて教組がすばらしい活動を始め、毎年、職場演劇コンクールを実施することになる。

農村を中心にした青年演劇は、これら職場演劇のリーダーによって指導され、数年後には黄金期を迎えることになった。

（県民演劇制作委員長・芸振理事）

㈱大分メンテナンス

大分市高城南町12－3

〒870－01

TEL　代表　51－0056

文化ニュース

・県立宇佐風土記の丘、歴史民俗資料館を訪ねて

2月28日、芸振理事会の一行が親ぼくを兼ねて、新装なった、宇佐の民俗資料館を見学した。着いた頃から、あいにくの雨が、古墳群の密集した宇佐平野をすっぽりとおおい、風土記の丘の散策はできなかったが歴史民俗資料の展示されている館内を、くまなく案内され、県内唯一の歴史資料館としての役割や、施設、内容をつぶさに見学することができた。

宇佐八幡や、六郷満山の文化、富貴寺の世界などすでに大分県の人達にはおなじみのもので一度は現地で実物との対面はしているものの、周到な調査に裏づけられた分類や、解説は、あらためて資料館のもつ意義を認識させてくれた。古墳めぐりができなかったことは残念であったが、ご好意で、燻蒸室、修理・工作室保存科学室、収蔵庫、特別収蔵庫など、施設をみる機会が与えられたことは大きな収穫であった。

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃